

語法だけじゃない， G5の用例と用法注記にも注目

畠山利一



■自然な英文が豊富な G5の用例

用例は「辞書の定義のきわめて重要な部分 (a critical part of dictionary definition)」であると Landau (2001: 207) は言う。辞書は用例によって語の使い方を示す。語義が骨格ならば，用例は肉付きにたとえられよう。用例がすぐれていること。これは見逃してはならない G5の特長である。それは日本語話者 (JS) と英語話者 (ES) の両執筆者が力を合わせて一つ一つ用例を作っているからである。G5の用例を見ていこう。(1)-(4)は JS がどのような用例が必要かを説明し，それに基づいて ES が作成したものである。いずれも自然なよい英文である。

- (1) It's a *tragedy* that so many children are unable to get a decent education. きわめて多くの子供たちがきちんとした教育を受けられないのは悲しむべきことだ。
- (2) It's a *tragedy* to see so much food going to waste. たくさんの食べ物が無駄されるのを見るのは悲しいことだ。
- (3) He stuck his foot out and *tripped* me. 彼は足を突き出して私をつまずかせた。
- (4) You *would* [might] be wise to talk with your boss about the problem. = It *would be wise to talk*... その問題については上司に相談するのが賢明だろう。

(1)(2)は *tragedy* 語義②「悲しむべきこと，嘆かわしいこと」の用例である。この語義では「it ... that 節」と「it ... to do」の文型で使うこと

をコーパスなどで確認したのちに作った。

(3)は *trip* 他動詞「①〈人〉をつまずかせる，よろめかせる」の用例である。状況がよく分かる文ではなかろうか。

(4)は *wise* の成句「would [might] be wise to do ... するのが賢明だろう」の用例である。訳語だけでは文の主語が何か分からない。「人」の場合と「仮主語の it」の場合があることを示すために提示した。

次は *wit* の成句「have [keep] one's wits about one 冷静でいる」の用例である。G5で(5) a は(5) b に変わった。

- (5) a. She kept her wits about her when her bag was stolen, and called for a policeman nearby. 彼女はバッグを盗まれても落ち着いて，近くにいる警官を呼んだ。
- b. When her bag was stolen, she kept her wits about her and called a police officer nearby.

(5) a にある *called for* の *for* を削除し，PC (politically correct 政治的に正しい) を考慮して *policeman* を *police officer* に変えたのは JS である。ES はさらに語順を変えて(5) bの方が自然であると主張した。

■文法書と連携してより深く辞書を利用する

G5には [限定] [叙述] という用法注記がある。形容詞の限定用法と叙述用法を表している。この用語を知らない生徒がいると思われる。文法

書などでその意味を知れば辞書をより有効に利用できる。以下、例をあげて述べる。

- (6) This is a wonderful movie.
- (7) The movie is wonderful.
- (8) I found the movie wonderful.
- (9) He has a glass full of water.

(6)では wonderful は movie を限定している。(7)では主語の、(8)では目的語の movie を wonderful であると叙述している。これらの用語は、語の文中での機能に由来している。

『ベーシックジーニアス』(BG),『プラクティカルジーニアス』(PG)では[限定]としないで[名詞の前で]と、文中の位置による表記にしている。これは「限定」という用語を知らなくても分かるので、初級・中級の学習者には分かりやすいという利点がある。しかし限定用法の形容詞は常に名詞の前に置かれるとは限らない。(9)の full のように後ろにおいて名詞を限定することもある。[限定]の方が[名詞の前で]よりも範囲が広く、正確な言い方である。

[叙述]をBG, PGでは[補語として]としている。[叙述]と[補語として]は用語が異なるだけで同じ内容をさしている。[叙述]を文中の位置で表すことは困難である。(7)のような be 動詞だけでなく, become, seem などの語の後ろに来ることもあるので[連結動詞の後ろで]とすると,(8)のような目的語の後ろにくる場合を含まない。英英辞典では LDOCE 6 と OALD 9 が [not before noun] としている。[名詞の前では用いない]とでもなるのだろう。これは「名詞の前以外ならどこにおいてもよい」と利用者が誤解するかもしれない、分かりにくいのではないか。

このようなわけで G5 では [限定] [叙述] という注記が使われ、次のように記述されている。

asleep 形 [叙述] ① 眠って (いる) …
[語法] (1) [限定用法] a) 同じ意味を限定用

法の形容詞で表現するには sleeping を用いる: 「a sleeping [=an asleep] baby 眠っている赤ん坊。

present¹ 形 ① [限定] 現在の, 今の ||
at the present time [moment] 現時点で。
② [叙述] […に] 出席している, … [at]

asleep では sleeping との関係が語法として説明されている。present では ① の語義では限定用法, ② の語義では叙述用法しかないことが明記されている。したがって at the present time は「出席している時に」の意味にはならない。

文法書などからえた知識を援用して G5 の豊かな内容をくみ取っていただきたい。

■おわりに

Sekiyama (2016) によると電子辞書の日本での出荷台数は2007年がピークで, 2014年はその約半分である142万台に減少している。スマートフォンやネット上の辞書の使用が年々増えているとのことである。

辞書メディアが多様化し, 紙の辞書に触れる機会はますます減りそうである。しかし学習者は初めに書籍辞書を使って辞書の構造を知っておくことが必要であろう。そうすればどのようなメディアで辞書を使うことになっても求める情報に行きつきやすい。またメディアの形がどう変わっても辞書は内容が命であることに変わりはない。

◆参考文献

- Landau, Sydney I. (2001) *Dictionaries: The Art and Craft of Lexicography* (2nd ed.). Cambridge University Press.
- Sekiyama, Kenji. (2016) Twenty-Five Years of History and Prospects of Handheld Unabridged Electronic Dictionaries in Japan. *LEXICON*, 46. 岩崎研究会.

(はたけやま としかず・大阪国際大学名誉教授)